新春に詠む短歌

「早く来い来いお正月」と地下街にお節料理の見本は唄ふ　興津　甲種

子どもの頃は新しい着物、下駄、お年玉、お節料理と楽しいお正月だった。その上、数え年で一歳大きくなることが、大変な喜びだった。今は、齢を重ねて今年の無事を願う正月となった。

あらあらし雰囲気の中金木犀の甘やかな匂いに心和(やわ)らぐ　飯村　和子

めまぐるしく変わる世界の流れ、環境の変化など、自分の思いにも波立つ時がもろもろありますが、花の香り、色などに逢うと思わずほっといたします。

初日の出姿勢正して合掌す霞ヶ浦はつつしみ深し　小松﨑みずえ

霞ヶ浦の湖畔で、初日の出を拝んだ。昨日までの太陽と同じなのに、年が改まり感懐が伴うため、森厳の気が漂ってきた。

だっこしてぎゅっと抱いてとせがみくる汝は私の娘のむすめ　福原　安栄

仕事を持つ娘を支えるべく、その幼い子の世話役を少々引き受けている。昔、勤めに出ていた私のために母がしてくれたように。この子たちが日本の明日(おもと)を担うと信じて。

床の間に活けし万年青の冴え冴えと水ふくみおり良き年あける　海老澤幸子

庭の隅に、葉の汚れた万年青を剪って、床の間に活けると、翌朝は思った以上に青々とし葉の形にも勢いがついていた。なんだか今年はいいことがありそうな気がする。

神棚に若水(わかみず)供え元旦の儀式を終えて祝膳囲む　海老原鯱子

年の初めにその家の主が若水を汲んで神棚に供えます。今年の家内安全と健康を祈り膳につきます。

あらたまの光の朝に先ず屠蘇をヴェネチァングラスにワインを満たす　和希　明美

オーストラリアに嫁ぎし娘からのプレゼントのグラスに赤のワイン満たし、家族の幸福を祈る娘たちの儀式にのっとって日本の夫と私もあやかりて。

思いきり勉強出来る幸せよ灯火管制ふと思い出す　貝塚　高秀

今年の春は孫の三人が大学、高校生になる。同じ年齢の頃、私は東京に居て、空襲で学校も焼かれ、夜は空襲警報のサイレンで電灯も消されてしまったことが忘れられない。

万華鏡逆上がりして見る風景が覗けるような空の大きさ　井上　秀子

子どもの頃に、逆上がりに何度も挑戦して、出来たときのよろこびは今でも忘れない。それを歌にしました。

珊瑚礁の生死が分ける沖縄の海は緑と深き藍色　宇留野むつみ

春の沖縄の海は死んだ珊瑚礁のところが黒っぽく変色して、無残な姿をさらけ出していた。

凛として寒空あおぐ木蓮の慎(つつ)ましやかに花芽をいだく　金丸　玉貴

花も落葉も季節の先駆けの木蓮、枯葉を風に流した裸木には、既に花芽が春の訪れを待っている。

ゆく径は右も左も蓮田(はちすだ)の白藕たけき花咲き渡る　菊地　公代

見渡す限り続く蓮田の開花時に会い、一様に咲く白蓮の余りに上品な美しさに見とれました。

無患樹の黒き実ひとつ夢紡ぐ初春(はる)の空澄む追羽根の音　櫻井　雅江

幼な日に父が押し絵の羽子板と羽根を揃えてくれた。正月は晴れ着の長い袂で近所の友だちと追羽根を楽しんだ。

土浦産蓮根を待つ幾人の顔浮かべつつ心づもりする　平澤　良子

土浦産の蓮根は日本一。毎年待っている人がいる。今年はいつ送ろうか。私の年中行事。

春の来し証しの如く堅香子の若芽は出でぬ雪の間(あわい)に　松﨑　國男

雪が残る三月、筑波山の斜面には、春を告げるように片栗の若芽が眠りから覚め、登山者を愉しませてくれる。

ひとときを山茶花の花咲きほこり今は樹下にくれなゐの渦　山口　節子

山茶花の花がひとときは華やかに咲き誇っていたが、今は花も散り樹の下はくれなゐの渦のようです。

新春に詠む俳句

初詣多士済々の人に逢う

日ごろは疎遠に過ぎていたが、初詣で顔を合わせたあの人、この人。みんな何かに打ち込んでいて活躍中。こうした優秀な人たちに逢うのも初詣の縁。無駄に年を取ってはいられない。

大久保秀夫

初春の湖風ひらく帆走船

霞ヶ浦のヨットハーバーに並んでいるヨット。新しい年の風を切って、今まさに一斉に進もうとしている。そのたくましい若者の顔は初日に輝いている。

加藤　節子

神木の千年の風初明り

新しい年を迎えて、改めて見上げるご神木の威容に気が引き締まる。人の世を見つめて来た千年という歳月。ご神木のもたらす風は何やら尊い。

上村　しづ

初空の鳶風となる高さまで

真っ青に澄みきった初空。ゆうゆうと輪を描きながら飛ぶ鳶。「おーい鳶よ！何が見えるんだい」点となり風となって幸せを探しに行ったのだろう。青い空が残っている。

狩谷　諭

朝刊の包み込みたる初茜

分厚い元旦の新聞。手にずしりと重い。それは新鮮な重さ。初日の出直前のくれない色に染まっている。世界の平和が実現できるような、嬉しい記事が盛りだくさんありますように…。

沢辺　栄子

だるま市大きな目玉入れてやり

どうぞ今年も健康に恵まれますように。欲張らないで、この一つだけを願って、達磨の目に墨を入れる。さあ、願いが叶ったら、もう一つの目を入れて氏神様におさめてあげよう。

白石　文吾

膨らんで弾んで来たる初雀

いつも見慣れている雀たち。年が改まってのお元日、どことなく、ふくよかでうれしそう。チュンチュン、いつの間にか、三羽が五羽に七羽に。あら、また。初春の日差しがいっぱい。

関沢　美江

初旅を占う集いかしましく

冬休みの間に行く総勢十二名の家族旅行。これが毎年、私の初旅。今年は北？それとも東…旅の前の行く先が決まるまでの楽しく、賑やかな集い。

高田　智子

新春に詠む川柳

元朝に笑顔が揃い祝い膳

子どもがそれぞれ独立して一家を構えているが、全員が一堂に顔を合わすのが元日にと親元に集まる。どの顔もつつがなく新年を迎えた悦びが溢れ、子や孫に囲まれ祝いの膳をとる至福。

加藤　光山

欲張った絵馬が居並ぶ初詣

初詣に行くと、溢れんばかりの絵馬が吊ってある。何とも欲張りな願い事の多いことか。神様も一つだけなら聞いてくれるかも。

谷藤美智子

お年玉孫は不満の顔で開け

昨今の物価高は年金生活者にもきびしい。孫はどうやらお年玉が予想より少なかったようだ。「ありがとう」の声も心なしか元気がなく聞こえる。来年に期待して貰おうか。

太田　鳴子

金色の牛が売れ筋不況明け

昨年は未曾有の大不況、今年こそと干支の牛に託す。過去において不況の翌年は金色の置物が良く売れたという。眩しすぎる黄金は不要だが、人並みの暮しを庶民は切に祈る。

富永　柳道

新顔も増えて栄える年始

子どもたちが結婚して、親族が増え家が栄えて行くことは、幸せなことです。賑やかに祝い膳に並ぶ顔を見ながら、家族の健康を祈っている。

須藤　桜花

成績が上がりおまけのお年玉

目の中に入れても痛くないほど愛しい孫、学期末の通知表に努力の結果が評価された。「よく頑張ったね」と頑張り賞を添えてあげたお年玉。

関口　進吾

お雑煮に隠し味そえ母ごころ

故郷に帰って来た子どもや孫たちに、お正月定番のお雑煮を食べさせる。ちょっぴり愛情という母の隠し味を添えて、子から孫へと我が家の味を伝えて行って欲しい。

永井　花菜

初詣逢う人ごとにおめでとう

除夜の鐘を聞きながら初詣に急ぐ、知り合いに会うたび新年のあいさつをするため、神前までなかなか進めない。今年から後期高齢者の仲間入り、百歳への道を神に祈願して来た。

近藤　稔夫